

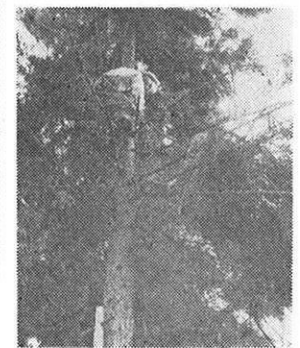
る。しかし注目すべき林業のニューフェイスは、海をへだてた天草郡に現われた。モリシマアカシヤ造林がそれである。集約林業からは見放されていた天草に、痛悪地利用高度化のチャンピオンとして、このモリシマが渡って来てから、先輩の福岡県を抜いて、堅実に一千町歩の造林地を造成してしまつたことは特筆ものである。

熊本県が林産県であることの一画は、その特種林産物の点でうかがい知られると思う。すなわち、つばきの実、はぜの実などで全国一、二位を占め、たけのこ

変りものに栄光あり

山口竹治さんの育林法

(玉名郡三加和村)



山口竹治さん(59)の明快な経済論を聞いてみよう。「例えばここに五百万円の山がある。その五百万円を一年早く取るか、一年遅れて取るかでは大違いだ。わしらは貧乏だ。一刻も早く太

枝落しする山口さん

むろん、尋常な仕事ぶりではない。手入れのといた山はまるで杉畑だ。「毎日、精一杯働くことが苦にならないからだ」と心だけが、先祖の残した財産で「営々としてかち得た二十八畝の杉山に栄光が待っている。」

・竹材・くりの実や椎茸などの生産も有数である。
要するに九州の脊稜の深山幽谷から、里山を経て西海の島々にまで、まことに多彩な林業が芽生え、そして育くまれた。すでに旧くからドツカと根を下ろしたスギ、ヒノキ、マツの育林技術と経営があり、新しい感覚によるモリシマなどの早期育成林業がある。オーソドックスの用材林業の蔭に、地味ながら特用林産の花も咲き続けてきた。そして、製紙パルプの大企業から、製材工場のささやかなものにもいたるまで、林産工業も然るべ

(W)

く立地したが、しよせん熊本県は木材の造出供給の基地たるの地位を築きあげてきているといえよう。それは、日本の中央部から離れて、県土の六五%にあたる四十八万余町の林野を持ち、温暖多雨で林木生育の好条件を有する熊本県として当然のことである。しかし問題なのは、林野の絶対面積もさることながら、人口一人当り林野面積が〇・四〇ヘクタールと、全国〇・二五ヘクタールを遙かに引離していることである。だから木材供給源としてのウエイトは、実は今よりもっと高くてもよいはずである。大変大きな云い方だが、林野面積四十八万町に対し、あえて過伐といわれながら、用材生産量百三十一万立方メートル(一町当り二・七立方メートル)という数字は、その恵まれた自然的立地条件に対して、決して十分なものではない。もっともそこを今後の大きなプラス・アルファの生み出される可能性があるといえるのである。いい換えれば生産力の増大である。これは日本林業の大きな課題でもある。しかしそれは、かつての日本の「木材の増産」や、「山に野に木を植えよう」ではないのである。大きく変ってきた社会的経済的条件に対応し、生産性の向上を通じての生産増大でなければならぬのである。更にそれが農林家の所得の上昇につながり、その経済生活を豊かにできて、はじめて目的は達せられるのである。

家族的経営と

企業の経営

そのような狙いで、日本林業に新しい方向を与えようとする林業基本法もできようとしているのであるが、その中の要部をなす構造改善事業もいよいよ緒につくことになった。最近目についた木材伐出業者の賃金比較によっても、本県は全国最低クラスで、明かに後進県である。十分の財政投資に裏付けられた林業構造改善の諸施策が、必要であり、同時に効果も目に見えてあらわれるであろうことが予想しうる。

私は昨年、五木村で行なわれた林業構造改善計画のための予備的調査に参加する機会を得た。それは最も奥地の山間村、古い因習の名残りをとどめ、災害の多発に悩む未開発村の構造改善であった。しかし同時に、林業という産業が宿命的にもつてきた土地所有関係の制約や非企業性や、従事者のおくれた意識や姿勢というものについても教えられるところがあつた。このようなものを全面的に切換えることはまず不可能だが、しかしできるだけそれらをチェックし、林家や山村の人達の経済生活を水平線に引上げ、林業総生産をも高めていくという努力は必要である。

そこでまず問題になるものに家族経営的林業がある。本県林家一戸当りの林野

所有は、全国平均よりかなり零細である

(一・七町、全国平均は二・四町)。一方、一般に農家の兼業機会が他県より少なく、農外所得は低いようである。しかし農業所得までが低くて、農外所得の源泉の大部分を林業に求めねばならぬような山村は少なくない。慣行共有林の分割整理や共同経営、買取、分収林の設定などを通じて、農家の山林経営規模を五一〇町に近づけること、同時に林地の集団化などを図ることが望ましいのである。一〇一〇町は「林主農従」的経営として、これも家族経営的林業の範疇に入れてよい。統計的にいって、五一二〇町層が植伐など生産活動の一番盛んな、

好ましい階層とみられる。

また植林手入れのために投下する労働量の半分以上を雇用労働によらねばならぬ保有面積階層は、二〇町から上の層である。これは企業的林業として、伸びていかねばならないのである。保有規模は大きいほど生産力があるとは林学上の通説であつたが、五〇町以上ぐらゐの層になると、かえって経営は粗放になり、一町歩当りの生産量は低下することが、これも統計的に示された。もつとずつと大きくなって会社経営となり技術者をもつようになる、また経営はよくなる。小国のような先進地でさえ真に企業的经营と呼び得るものは少ない。資産維持

焦点

のびる山の動脈

(八代郡泉村)

秘境五家荘——道なきが故に、菊池氏からも小西氏からも、そのほかあらゆる外界からの侵攻をうけつげなかつた五家荘。しかし今や、秘境のおもかげは急速に失われてきた。

五家荘の林道開発は、まず、戦前から始められていたのであるが、やはり、かつての侵略武将たちが手を焼いたと同様に、自然の障壁に悩まされ続けた。戦後、昭和二十六年、利用面積一万二千五百町歩、蓄材積七千万石の眠れる宝をよびさますため、あらためて本格的林道開

発が開始された。着工九年目、昭和三十三年、柿迫一横木および横木一五木を結ぶ各線が完成、五家荘を環状に道路が貫くことになった。

五家荘に生まれ五家荘に育つたというある老女は「とにかく歩いて行かずに、何もなかったですけん、そして月三、四へんな食糧ばかり上げなるとだけだなあ。苦しかったですばい」としみじみといった。「子供にアイスクリームば喰わせらるちゆうはなあ。夢のごたる話たい。」林道は、林産の開発にとどまらず、我々の想像以上の恩恵を五家荘の人々に及ぼしたに違いない。
現在、五家荘林道、延長一五・一結。しかし、林道開発はなお続けられていく。岩奥、推原を結びわゆる縦貫道路

のほか、葉木へ、水上へ、板木へ、蛸の足のようにのびていく。(W)

各地林業の方向

的経営に過ぎぬと評されるものもある。球磨五家荘方面になると、企業経営者としての感覚はさらに微かになる。貴重な山林の所有権が大量に県外に流出し、地元はわずかな労働報酬だけを恩恵的に受けとらねばならぬことになるのである。林業所得ではなんといっても大きいのが山林所得であり、地代なのである。山林を気前よく手放してはならない。買戻すことはまず容易でない。そしてできるだけ地元の林家経営の粒をそろえる方向にいくべきである。

森林保全を期す

影の地帯 (阿蘇郡小国町)

よく人里離れた奥山で、白い保安帽の作業員と出会うことがあるが、治山工事はこのような甚だ地味な目立たぬ姿勢で行なわれる場合が多い

ここ阿蘇郡小国町の治山堰堤工事も町から二キロ入ったところ、傾斜二十五度の山腹に四カ所にわたって行なわれ、完成した。かつての二十八年大水害でこの溪谷は土砂の流出で見る影もなく崩壊し、下流の洪水禍を招いたことは未だに生々しい記憶として残っているが、山林の打撃は並大抵ではなかつた。この堰堤は、激しい流水や土砂の流出で山脚の崩れを防ぎ、溪流を調節する水路の役目もし、永久的に山の保全は保証されるわけである。下流の河川工事が万全を期したとしても、こうした上流の治山工事が進まなければ災害対策も十分ではなく、山林保護と同時に重要な役割も果たしているわけ。(K)

困難な林道整備作業

